活動報告書

M6

MUSICAL ACT

2019 | OCTOBER — DECEMBER

参加型ストリートミュージカルチーム エムシックス ミュージカル アクト

M6
MUSICAL ACT
2019 | OCTOBER — DECEMBER

参加型ストリートミュージカルチーム
エムシックス ミュージカルアクト
活動報告書

2 —— ミュージカル、その日常のドラマ
金森克雄

4 —— ［メンバー座談会］ミュージカルをめぐる冒険
マサヒロ　ナナ　コウキ　ヨシナリ

16 —— ［コラム］動き出せばこそ、不意に出会う瞬間
金森桂仙

18 —— 関係者メッセージ
おどるなつこ　大和田千弘　いとうすずの　管谷考介
永井みぎわ　岩本真実　山本正登　参加者保護者

22 —— M6 MUSICAL ACTに参加した若者たちとその変化

この冊子は生きづらさを抱える若者たちが、ミュージカルの舞台を目標に稽古に取り組んだ、2019年8月末から12月末の記録です。

心の傷を自分の勲章と感じられるはたらきがアートである
ティム・ロリンズ

ミュージカル、その日常のドラマ

演出 金森克雄（K2 International Group代表）

自分は生きている価値がない、自分がいなくなっても誰も気づかない、自分は誰からも必要とされていない、そう思っている若者。彼ら以上に不幸な存在があるでしょうか。このような若者に必要なのは、生きている土俵そのものがビッグチェンジするようなきっかけです。

ヨット航海に出よう！に始まり、今まで私たちは不登校や社会的ひきこもりなど生きづらさを抱えた若者たちに、思いもよらないきっかけをつくってきました。一人で袋小路に入る彼ら・彼女らの苦しみや絶望感を思えば、今日と明日が断絶するほどのダイナミックな飛躍が必要だと考えるからです。そこに必然性さえあれば、若者はきっとその飛躍を受け入れます。ひきこもりだった若者が舞台で踊る。そこには凄いギャップがありますが、本人のなかで「そうなりたい」と期待しているものと共鳴しているからです。

今回、ミュージカルに挑戦した若者たちは「自己表現がしたい！」という意欲のある若者たちではありません。自分の内側にあるよくわからないものをどう表現すればよいのか、否このまま表現しないでいい、そんな気持ちになっている若者たちです。その子たちがミュージカルという場、キャストという立場を与えられたときに湧き出たものは、表現をしたい！ミュージカルをしたい！という若者とは全く違う、凄いものがありました。自分でも気づいてないものに出会い続けているようでした。

学童の子どもたちを含めて総勢30余名で始まったマカフシギなミュージカルの稽古ですが、途中で来られなくなった子もいました。周りの環境の変化に抗えなかった子、自らと向き合うことで自分自身の問題が明るみになり苦しんだ子、個々の理由、それぞれの問題にドラマがあり、その子たちのドラマこそが非常に貴重なものでした。

ネクストステージでは、自分たちで舞台をつくり、衣装を縫い、大道具をつくり、お客さんを集めるためのビラを撒く、その行程を生活と地続きの長いタームでやってみたい。ミュージカルというのはそれを演じる瞬間だけではなく、その背後に長いプロセスがあります。そして、そこには様々なドラマがあります。共同生活を支援の根幹とする私たちにとって、ミュージカルというのは、生活することと同じなのです。

メンバー座談会

ミュージカルをめぐる冒険

NPO法人ヒューマンフェローシップによる新たなフリースクール「M6 MUSICAL ACT」は、2019年12月21日・土（みなとみらい）、22日・日（根岸）にミュージカルの舞台に立ちました。それは生きづらさを抱えた若者たちの未知なる挑戦。発表会を終えたメンバーがその冒険を振り返りました！

マサヒロ　中学生の頃から不登校で、生活リズムを立て直すためにK2の寮生活に入る。雑学が豊富で歴史モノに強い。趣味は詩と小説を書くこと。

ナナ　中学の頃から学校を休みがちに。朝起きるのが苦手。高校の授業でヒューマンフェローシップが実施する「よこはま型若者自立塾」に参加。こだわりが強く、本人も変な子だと思っている。趣味は手芸と作詞と歌を歌うこと。

コウキ　中学生のときは部活だけに参加する生活を送る。高校卒業後、進路が考えられずにヒューマンフェローシップが運営する就労移行支援事務所「HataLabo」に登録。趣味はオンラインゲーム。こだわりが強く、納得できないと進めなかった。

ヨシナリ　小学校から不登校気味。集団行動が苦手で人付き合いが下手。自分に自信がなく、K2の海外プログラムに参加。高校も卒業し、これからの進路を模索中。趣味はゲーム、スポーツ、読書（ライトノベル）。

「ナイトシンクヨコハマ」（12月21日・土、みなとみらい）での舞台（P7とも）

ナイトシンクヨコハマ、M6での2日間のステージ

――まずは発表会、お疲れさまでした。

ヨシナリ　なんか急に暇になった感じがするね。

ナナ　私はミュージカルロスがあるかな。「スーパースター」から「Overture」まで、ミュージカルの歌が今も頭の中を巡っているし、今日も就労中、足だけミュージカルを踊ってて…。

ヨシナリ　マサヒロ　コウキ　こわっ！

マサヒロ　しかし、本番は緊張したね。先生から「緊張すると声が出にくくなるよ」って言われていたけど、その言葉が身に染みたな。

コウキ　でも、大きな問題なく発表会を終えられたのは、みんなで頑張ってきたことの成果だね。

ヨシナリ　僕、本番の2週間前くらいに自分だけの役をもらったんだよね。ヘロデ王を楽しませる道化役。「好き勝手に動け」と言われて逆に悩んだけど、発表会の舞台でも、とにかく全力で動いた。緊張は…もともとしないタチ。

マサヒロ　ヨシナリさん、出番の直前まで衣装を着たままゲームしてたよね。「いま、何時？」って聞いたら、「あ、10分前か。そろそろだな」みたいな（笑）。

ナナ　私、ナイトシンクの舞台には、体調を壊して出れなかった。なので、翌日M6での発表会が自分にとっての初日で、本番直前まで緊張した〜。でも、スポットライトを浴びたら、緊張している暇もなかったな。

コウキ　ナイトシンクの会場は野外で舞台も広かったけど、M6は天井が低くて観客席との距離が近いから、動きも変わって、全然、違う舞台だったね。

「K2が劇団立ち上げる」ってよ！

――ミュージカル劇団を立ち上げるって聞いたときは、どう思いました？

ナナ　え〜、ミュージカルなんてできるの！？って…。でも、稽古に入ったら『ジーザス・クライスト・スーパースター』の世界にのめりこめて、自分が自分でなくなるみたいだったのがすごく楽しかった。

マサヒロ　僕も最初はできるのかなって思ったけど、まず参加してみようと思った。先生に教わりながら、自分なりに頑張ればなんとかなるのかなと。調子が悪いときもあったけど、稽古には基本的に全部出て、本番が近づいてからは、夕食後、寮で1時間くらい自主練習をしたな。

ヨシナリ　僕は最初、あまりテンションが上がらなくて、金森さんにダメな奴はリストラだぞーって言われても、リストラされたらそのときはそのときって（笑）。でも、途中からなぜか真剣になったね。

コウキ　僕は最初の稽古のとき、先生のおどるなつこさんのダンスを見て、やってみたいなって。自分が踊ったらどうなるのかなっていう妙な好奇心があった。

――舞台に上がるのはほとんど経験がないと思うのですが、躊躇はなかったのかしら。

マサヒロ　K2ってイベント事が多いから、着ぐるみで呼び込みをしたり、マルシェで声を出したり、人前でなにかやることに対する恥ずかしさの殻はわりと破っていたかな。

ナナ　カラオケ大会もあるしね。私は音痴なのを気にしていて、

学校の歌のテストでは、毎回、聞こえないように歌ってよく怒られていたけど、K2のカラオケ大会で仲のよい友だちと一緒だと歌える。流れに便乗できるんだよね。

コウキ　体を動かすことは昔から好きだったけど、人前に出て演じることには少し抵抗があったな。稽古が始まってからは、リズムが全然とれなかったりして、少し嫌になってしまったことも。

――どうやって本番まで奮い立たせたのですか？

コウキ　発表会の会場になるナイトシンクをみんなで見に行ってから、軽くスイッチが入ったんじゃないかな。

ナナ　私はあの光の量を見てドキドキした〜。金森さんが、こんな大舞台、人生で1回きりのチャンスだ！って。

コウキ　会場を見た帰りにメンバーとご飯を食べに行ったら、みんな「ここまで来た以上は！」って決起集会さながら（笑）。発表会に近づくにつれて、なつこさんのレッスンから真剣さが伝わってきて、稽古場の空気が張り詰めていったよね。

『ジーザス・クライスト・スーパースター』にのめりこんだ4ヶ月間の稽古

――稽古はどうでしたか？

マサヒロ　日常生活では大声を出したり、踊ったりしないから、表現する、みたいなことをできたのは貴重だった。レッスンでは「声の出し方」を教えてもらったことが印象に残っているかな。中学校の合唱コンクールでも声を出していたけど、声変わりの時期で声の出し方を学べなかったので。

コウキ　すごく声が変わったよね。びっくりした。

ナナ　男性なのに綺麗な高い声が出るよね。

マサヒロ　なんかそんなふうに言われると嬉しいな。自分は歌うのが好きなんだなってあらためて思ったし、習うことも好きなんだなって。

ナナ　私は稽古のときに、スタジオの鏡を見ると落ち込んじゃって…。みんなはできるのに、自分はできないなって。それで土曜日も寮の部屋のドアを閉めて自主練習をしたり、ヨシナリさんや寮のメンバーに教えてもらったりした。

マサヒロ　ナナさんとヨシナリさんは、練習をしすぎて寮の門限を過ぎそうになっていたよね（笑）。熱意がずばぬけてた。僕が練習でへこたれそうになったのは、金森さんが「外郎売りの口上を抜き打ちでチェックするからな」って言ったとき…。

ナナ　あったね！私、寮とか、廊下とかで一生懸命、練習したな。

ヨシナリ　僕は燃えたね〜。ものすごく練習した。いまも携帯していますよ、ほら。

——うわ、しわくちゃになってますね。どなたかこれ、読んでもらえませんか。

ヨシナリ　よっしゃ、やりますか。
…拙者親方と申すは、お立会の中うちに、御存じのお方もござりましょうが、お江戸を発たって二十里上方、相州小田原一色町をお過ぎなされて…破風には菊に桐のとうの御紋を御赦免あって、系図正しき薬でござる。（実演3分）

——やりきるところがすごい（笑）

ヨシナリ　まだ段落1なので、序の口ですけどね。

M6 Musical ACTに参加して

——ミュージカルに参加した感想を教えてください。

コウキ　僕はあまり人と接してこなかったから、ミュージカルで仲良くしてもらえたのがよかったかな。

マサヒロ　今回のミュージカルではいろいろな人の個性が生きていた気がする。ふだんは出せないから、個性って。馬鹿にされたりね。でも、こういうことを通じて出せたのはすごくよ

かった。

ナナ　私はふだんから、K2のスタッフからも「個性」と「ずれていること」は違うって指摘してもらうんだけど、ダメなことと変わったことの線引きができなくて、この社会の中でどこまで自由に生きていいのかわからない。それで引きこもってしまうのだけど…。

　ただ、今回みたいに「外で発表」というところまでいかなくても、自分だけの楽しみで止まってもいいから、自分が好きなことをもう少し表現してみたいなって思えるようになった。自分は歌ったり、踊ったりすることがすごく好きなことがわかったかな。

ヨシナリ　僕は好き勝手に動いてもいいっていう役をもらえて、全力で動いていいということがすごく嬉しかった。なんか、いつも抑えて動いているという感じがあったので。自分は動くのが好きだってことをあらためて知った。

岩本（K2スタッフ）　ヨシナリとナナは、自分が好きなことをやったら、人から嫌がられた経験があるからね。

ヨシナリ　そこについてはふっきれて、ほかの人と違うことをやることにほとんど抵抗がない。自分を貫ける。そういう意味では自由に生きているかな。

岩本　ヘロデはそういうヨシナリのためにつくられた役だよ。

マサヒロ　実は、発表会のときも体調が悪くて…。

コウキ　ナイトシンクも出られるか、危うかったよね。

マサヒロ　肩を貸してもらったよね。僕は去年の3月にK2に入って、当初、環境の変化もあってすぐに寝込んじゃうこともあったんだけど、K2から通信制の高校に通わせてもらって卒業できた。卒業するときに金森さんから賞状をもらって「みんなからすごく大切にされてたんだよ」って言われました。君もこれからは人を大切にする側になってね、とも。周りに人に助けてもらって、自分があるということはすごく理解していて…今回のミュージカルもそうだったと思う。

――これからK2でミュージカルをやりたいっていう子にはなんてアドバイスしますか？

ヨシナリ　緊張するな、とりあえず笑え！

マサヒロ　僕はそんな上から言えないけど（笑）、言うとしたら…練習していればそれなりにかたちになるよって。

コウキ　頑張っていれば、できることも結構ある、ということかな。恥ずかしいからみんなに合わせるのではなく、自分でやる気持ちが大事だなって。自分から頑張ってほしいと思う。

ナナ　みんな、いいことを言うから話しづらいんだけど…今回、私たちは一つの作品をつくったわけだよね。来年、違う誰かが『ジーザス』を演じれば、違う作品になるわけで。それをつくっていくことの楽しさがある。一つのものをつくりあげることで、新しいコミュニケーションも生まれる。そこを楽しんでいただけたら…。

ヨシナリ　めっちゃいい話をしてるよ。では、お後がよろしいようで（笑）

2019年12月26日M6スタジオにて
インタビュー：大谷薫子

Live Box M6（12月22日・日、根岸）で行われたクリスマスフェスタでの発表会

K2 Koreaのメンバー

コラム ― 金森桂仙（スタッフ）

動き出せばこそ、不意に出会う瞬間

始まりのお先真っ暗感

音程がずれているというより音が存在しない、口が開かないとかいう以前にマスクを外せない、ストレッチで挫折して泣く、そもそも耳が聴こえない…ミュージカルが始まった当初、集まったメンバーたちと何度か練習をしたときに思い浮かんだのは、これでどうやってミュージカルを上演するのだ？という、お先真っ暗感だ。

ましてや当初は楽譜もない、ダンスの振り付けもない、あるのは演出をする代表の金森さんの経験と自信だけ、といった有様であった。何から始めていいかもわからないなかで覚えているのは、それでも集まったメンバーたちの、不思議と楽しそうな姿だった。正直、当時は、なんでそんなにお気楽でいられるのだ！と解決すべき課題が山積みだった自分は、憤りすら感じていた。

光を射したなつこ先生の指導

そんな真っ暗闇のプロジェクトに光を射してくれたのは、振り付け講師として指導に来てくれたおどるなつこ先生の存在であり、彼女のプロフェッショナルとしての優しさと厳しさだった。すでに書いた通り、とてもダンスやミュージカルを指導できるレベルではないメンバーたちである。講師との調整役をしていた私は、なつこ先生を前に申し訳ない気持ちでいっぱいだったのだが、彼女は集団でのレッスンにも関わらず、まるで個別指導をしているかのように、それぞれのできること、チャレンジできることを探りながらステップアップさせていった。そして一般的には失礼に当たるような言動や行動も笑顔で受け止めつつ、レッスンが始まる前と後に、一人ひとりの名前を呼びながら声をかけていった。その姿には、誰であっても誠実に、敬意をもって接する姿勢と優しさに満ちていた。そしてそんな彼女の振る舞いに、でこぼこなメンバーたちも次第に心をひらいていき、練習にも熱がこもるようになる。

しかし、なつこ先生の凄さはここからである。ほとんどリハビリのようだった練習風景であっても笑顔をくずさなかった先生の表情が、発表の日が近づくにつれ徐々に厳しさを帯びていく。真面目ではあっても、どこかで真剣になりきれないメンバーたちにとって、それは必要な厳しさであった。と同時に、本番のステージをしっかりと見られるものに仕上げる、というなつこ先生のプロフェッショナルとしての姿勢には、裏方の私もみんなと同様にたくさんのことを学ばせてもらった。

スタジオの隅、稽古を横目に事務作業に取り組んでいた

心を揺さぶられた本番でのステージ

そして迎えた本番。舞台に立つ彼らに、当初の面影はない。

幻想的で近未来的な舞台の上で照明に照らされたみんなのまっすぐな表情と、無数の映し出される影。曲のテーマに合わせ、躍動する身体とパフォーマンスとしてのクオリティには、鳥肌が立つような感動がそこにはあった。

観客として来た方々には申し訳ないが、始まりの姿と、そして本番に至るまでのプロセスを知る者にしか味わえない、心を揺さぶられる体験である。

真っ暗闇のなかでスタートしたこのプロジェクトと、いま光に照らされて生き生きと歌い、踊る若者たちの姿は、なんだか不思議にもナイトシンクのステージにシンクロしているように見えた。

今回のミュージカルは、かなり短い期間で本番まで駆け抜けたプログラムであり、裏方でしか関わっていない私なんぞが、「ミュージカルとは？」とか「若者たちにとっての表現とは？」みたいな大仰なことを言えるなにかを得たわけではない。私が感じたのは、さまざまなことが重なって生まれたこの不思議な人や場所とのめぐり合わせと、そこにあった本物の感動体験である。それは運とか縁とかいわれるものなのかもしれないが、世の中にはそういったことが思いがけないところに無数に散りばめられていて、動き出せばこそ出会い、そして不意に出会った、そんな瞬間こそが、若者であろうとなかろうと、どんな人にとっても大事なことではないだろうか。

MESSAGE TO
M6 MUSICAL ACT

メッセージが届いています

舞台に立つメンバーを、後ろからサポートし、ときには横に並んで支え、3ヶ月間をともに走り抜けた講師やスタッフ、保護者のメッセージをご紹介します。

表現では他者と違うことが光る

たくさんのお客様を前にした本番で、どのメンバーもまっすぐに前を向き、その瞬間を楽しんで踊り歌っていた。その姿からは数ヶ月前のそれぞれの身体はもう想像できない。

初期メンバーは表現したくて集まっているようには見えなかったが、それでも毎週顔を出してくれているので嫌ではないのだろうと、それぞれの心が動くことを見逃さないよう、興味の先にありそうなことを提案していった。それぞれは周囲の要求にとても敏感に応じ過ぎてしまうように感じたので、“してほしいこと”を求めるのではなく“私のつくりたいこと”として提案するようにし、また、メンバーからふと出てきたことも振付に反映していった。また、誰かに重圧をかけることがないよう責任あるポジションを細かく分けて、チームとして表現できるフォーメーションを組んだ。

「生きづらい」とは、人と違うことについて共感し合える仲間がいない状況ではないだろうか。誰もが他者とは全く違い、表現では他者と違うことが光る。舞台という非日常へ向けて、何が好きで何に喜びを感じるか？ それぞれが素直に感じ直してみることができ、お互いのそんなところを発見し合うことが、あの力強いステージにつながったように思う。この初舞台が次の一歩へのきっかけになったら嬉しいです。
おめでとうございます！

おどるなつこ（ダンス・振り付け）

舞台はみんなでつくられるもの

音楽監督として依頼のお話があったのが10月の終わり。本番が12月後半ということで、時間としても急を要するものでした。まだ会ったことがない子どもたち、若者たちと限られた僅かな時間で仕上げていかなければならず、少なからず不安がありました。私が参加した稽古初日は、とても印象に残っています。挨拶をしたとき、みんなじっとこちらの様子を見ていました。どんな人なのか、何をするのか、といった表情。これはまず、私という人間をさらけ出さなければ伝わらないと直感で思いました。みんなと一緒にストレッチや声出しに参加し、歌いながらピアノを弾いて全身で表現していると、ちょっとしたニュアンスにみんながしっかり応えてくれるのが伝わり、不安はなくなりました。一人ひとりの背景はわからなくとも、「やりたい」という気持ちが確かにある子たちばかり。吸収力が高く、周りをよく見て、聴いて、思いやりがある子たちばかりです。

舞台はみんなでつくられるもの。本番では、みんなが楽しそうに思いきり表現している姿が見られて胸が熱くなりました。正直に生きて、できる・できないではなく、やりたいという欲求こそが生きるためには大切なことだと思います。自分を認め、相手も尊重し、共につくることができました。この貴重な機会に参加できたことを心から嬉しく、感謝しております。

大和田千弘（音楽監督・音楽制作）

内に秘めていたものが、個人を照らすスポットライトになる

3ヶ月の稽古を経て、歌もダンスもできあがってくる頃になると、一人ひとりの顔つきが初めて会ったときとは全く違うものになっていたのがとても印象に残っています。歌に関しては、最初は自分の声質を気にしていたり、音がとれない、踊りながら歌えないなどの不安の言葉がありましたが、本番までには舞台を楽しむ余裕ができていました。音程だけでなく、声量や発音もハッキリとしてきてやる気満々という感じで、要望を出すとすぐに反応してくれたので、こちらもワクワクしました。

「歌う」ということは、自分の身体を楽器として奏でるので、本人の心情が大きく作用します。ふだん何かを内に秘めている、我慢している、その思いは音や動きになるとエネルギーとして前面に出てきて、個人を照らすスポットライトになります。それが個性ではないでしょうか。集団だからこそ、それぞれの個性を輝かせることで、集まる歌声は力強く色鮮やかになったのだと思います。

いとうすずの（音楽演出助手）

歌うことを楽しんでもらう

歌唱指導として参加するにあたり、とにかく歌うことを楽しんでもらうことだけを目標に挑みました。稽古には、私自身のスケジュールの都合で途中から合流することになっていたため、当初は不安でした。しかしいざ稽古場に行くと、なつこさんのダンスのレッスンで声を出していたので、みんな躊躇なく楽しそうに歌ったり踊ったりしていました。その様子を見て、なんの不安もなく輪の中に入ることができました（なつこさん、ありがとうございました）。また機会をいただけるのであれば、最初から最後まで参加したいと思います。

菅谷考介（歌・発声）

自己受容や解放につながる大切な体験

いちばん印象的だったのは参加者の変化、変容です。言われて動くところから、動きや歌を自分のものにしていき、本気を出し、そこから曲を完成していくプロセスを見ることができて、とても感動しました。さまざまな生きづらさの経験は、体との関係にも必ず表れます。そうしたなかでも「安全な場所」という共通概念とそれまでのお互いの関係性があったので、体を通した表現を共有できたのだと思います。声を出す、体を動かす、何かをみんなでつくりあげる、そしてただ純粋に楽しいことに集中する、このことは自己受容や解放につながるとても大切な体験だと感じました。

永井みぎわ（ヨガインストラクター）

波乱万丈な航海の先で

20数年前、私がボランティアスタッフとしてこの団体に参加したきっかけは、不登校・ひきこもりの子どもたちと南の島をヨットで航海する！というプロジェクトでした。私自身が船酔いはするし、いつまでも陸が見えなくて不安だし、英語も話せない…むしろ参加者の子どもたちに励まされながら、海の上でみんなと見た満天の星空、イルカと泳いだ海のことはいまも鮮明に覚えています。

今回の「若者たちとミュージカルを創る！」プロジェクト。あのヨット航海でのワクワクした気持ちを形にできないか…という想いで企画書を書きました。

しかし実際にスタートしてみると、絵に描いたようにはいかず、予定していた演目は難しすぎると諦め、参加者集めも苦労の連続、練習が始まっても、若者一人ひとりのいろいろな問題が起こり…本当に舞台が完成するのだろうか？と不安しかなかったです。

舞台発表の12月が近づいてくると、ワイワイ楽しい練習の場にだんだん緊張感が生まれ、11月末頃には「ミュージカルらしい！」練習風景に。そして、いざ本番の舞台に立ったのは、意外や意外なメンバーでした。そんなこともあり、本番直前の通し稽古を見たときには思わず目頭が熱くなりました。今回のミュージカルでは、舞台に立った人よりも、体験だけして尻込みをしてしまった若者のほうが数多くいました。次は舞台でスポットライトを浴びてくれたらいいな…。

岩本真実（スタッフ）

黒子役として参加して

ほとんどがミュージカル初参加の子ども・若者たち。どのように発表できるのかドキドキしながらフォローしましたが、4ヶ月間の練習を通してみるみる成長し、最終的には「ナイトシンクヨコハマ」という大舞台で初演をすることができました。このことは子ども・若者たちの大きな自信につながり、記憶に残る貴重な体験となったことを確信しています。また、専門的なスキルを持つ講師の方々の親身な関わりがあったからこそ、子ども・若者たちは最後までがんばり続けることができたのだと思います。

2日間の発表会では韓国からK2コリアのメンバーを迎え、同じ演目を発表してフィナーレで讃え合いました。このことは演出家の想いを超えたメッセージが含まれていたようで、その風景は今も目に焼きついています。

今回のプロジェクトをきっかけに、若者たちの表現する場が広がることを強く望んでおります。

最後に、アクターのみなさま、講師のみなさま、保護者のみなさま、発表を見てくださったみなさまにとって、記憶に残ることがあれば幸いです。

このような貴重な機会をいただき、どうもありがとうございました！

山本正登（スタッフ）

少しずつ取り戻しているもの

このミュージカルのプログラムに参加すると聞いたときは、本当にやるのかな？と思いました。高校では部活に入っていましたが、みんなで作り上げるような活動に対して傍観的で、好きではなさそうでした。高校2年生の頃から自分の進路に迷いはじめ、結果的に高校を辞めてしまいました。少しずつ本人の状態が悪くなり、イライラして私（親）や兄弟との関係も悪くなり、生活も昼夜が逆転しました。彼はずっとネットの世界だけを信じているように私には見えて、生身の人間と話して笑ったりしてほしいと心から思っていました。

ミュージカルの稽古が始まってしばらくすると「…やりたくない」とラインに送られてきました。どうなるかと思っていましたが、ミュージカルの本番当日を迎え、息子がほかのみんなと一緒の行動をしている姿を見て…泣きました。ダンスはだいぶ照れくさそうにしていましたけど…。

小さい子どもの歌声が本当にかわいくて、みんなの一生懸命さが伝わってきました。

ミュージカルを終えてからは、お正月休みも毎日のように友達と一緒にでかけたりして、家にじっとしていることはなかったです。徐々に学生のときの彼に戻ってきたのかな、と思っています。

参加者保護者

エムシックス ミュージカル アクト

M6 MUSICAL ACTに参加した若者たちとその変化

M6 MUSICAL ACTは生きづらさを抱える若者に対し、ミュージカル発表という「未知なる経験の提供」をし、社会に出るきっかけをつくり、一歩を踏み出すための機会をつくることを目的に実施されたプログラムです。私たちのところに相談に来る若者たちは、過去の失敗歴やいじめ経験、発達特性や不登校、就職活動の挫折などを経て、自立に対してそれぞれがさまざまな課題を抱えています。

今回、2019年8月末の練習開始から12月末の発表までに61名の若者がプログラムに参加しましたが、最後の発表まで活動を継続できたのは25名でした。25名のうち、中学生以上の参加者が17名。彼らに対し「プログラムに参加する前」と、「参加した後のいま」を比較したアンケートを実施し、集計した結果、変化の大きかった設問をご紹介します。

プログラムの活動実績

活動(練習)回数	参加者実数	練習参加のべ人数	本番(発表)参加者実数
47回	61名	824名	25名

本番（発表）参加者実数25名の内訳

男女比		年齢	
男	10	～15	10
女	5	～19	5
		～29	10
		～39	10

下に挙げた3つが、全20問のうち変化の大きかった設問です。

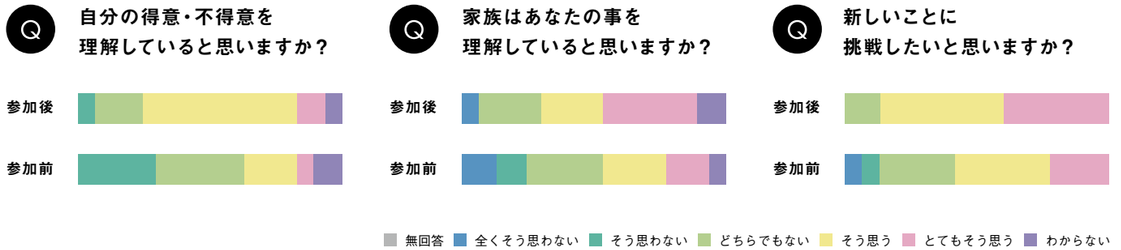
その他の設問も、変化の幅の大小はありますが、基本的にプログラム前後では改善傾向にあります。

特筆すべきは、プログラム自体は、課題を抱えた若者本人への直接的な働きかけのみであるにもかかわらず、ピックアップした「家族からの理解」のほかにも、改善の幅が大きい設問として、「両親との関係」「家族からの支援の実感」も挙げられる点です。

「ミュージカル」という表現の場を得て、若者たちの自己理解と挑戦意欲が高まることには、今回の短い期間、決して多くはない人数からでも、私たちも見てとることができました。同時に、彼らが自立に向けて大きな一歩を踏み出すために欠かすことのできない要素の一つでもある「家族からの理解」の、その実感を、このプログラムを通して得ることができるというのは、大きな発見でした。

推測にはなりますが、「ミュージカル」という、あらゆる意味でアクティブな活動を通して、否が応でも他者と関わらざるを得ない環境に置かれ、彼らは自己を見る新たな視点を発見したのではないでしょうか。

M6 MUSICAL ACTは、例えば面接練習や、ビジネスマナー講習、個別の面談といった直接的な「自立就労支援」の手法ではありません。しかし一歩が踏み出せず、足踏みしている若者たちにとっては大いなるきっかけとなり得るプログラムであると、あらためて実感した次第です。今後も彼らの変化に注目していきたいと思います。(事務局)



参加型ストリートミュージカルチーム
M6 MUSICAL ACT（エムシックス ミュージカル アクト）
活動報告書

発行日：2020年3月20日
企画：NPO法人ヒューマンフェローシップ
制作：大谷薫子
デザイン：藤原達（しなやかデザイン）
撮影：中川達彦・藤原達（P1, P14, P15, P25）

助成：公益財団法人横浜市芸術文化振興財団、横浜市
後援：横浜市こども青少年局　横浜市教育委員会